

過去のコラム（サンプル）

No465 2023年10月号

「公開対局」（田中 篤）

初めて世界選手権に出場してから、22年にもなる。すべてが新鮮な経験だったが、一番強烈な思い出は…

対局場について、自分の名札が置かれたテーブルを探して席につく。

ところが、どうしても私の名札が見当たらない。一緒に出ていた山崎さんなどは、なぜか笑いながら「頑張れよ」と声をかけてくる。頑張ろうにも席がない、と思っただら。会場にはちょっとしたステージがあり、そこに大盤が二組と、対局席が二局分。

大盤の一つに「日本 田中篤」と、大きく張り出してあった。相手はフィンランドの選手。もう一つには「中国 呂欽」。NC/NV 同士の対戦ということでステージに上げられたのだろうが、呂欽特大が対局している横で、しかもステージの上で指せ、ということだ。緊張しないわけがない。私が紅で順手炮になったが、内容ときたらひどいもので、「こんな手あるか！」とホテルで山崎さんにめちゃくちゃ怒られたものである。久々にトンピンで見返してみたが、今の私が見ても「こんな手あるか！」である。それ以降、この時の対戦相手とは世界選手権で何度も顔を合わせるものの、再戦

の機会に恵まれず。2019年になって、上海の大会での最終戦で激突。黒番の私が左馬盤河に引きずり込み、リベンジを果たしたのであった。

No451 2022年8月号

「狐の話」(田中 篤)

「きつねダンス」が話題になっている。最近会場としてよく利用されている「北とぴあ」がある王子には、関東全域の狐を統括するという「王子稻荷」がある。清代の幻想小説集「聊齋志異」(シャンチーを直接扱った作品がないのは残念だが、囿碁にまつわる「碁鬼」という傑作がある)にも、狐が人に化ける話がたくさん収録されている。主役はたいてい、一生懸命勉強しているのに、なかなか科挙に受からない書生。ずっと空き家だった隣家に、新しい一家(実は狐)が越して来る。この一家にはたいてい美しく気立ての良い娘(やっぱり狐)がいて、夜遅くまで勉強していると夜食を作ってくれたり、冬の夜は寒いだろうからと冬着を作ってくれたり、何かと世話を焼いてくれたりする。そうこうしているうちに隣人一家が狐であることが判明したりもするが、書生は科挙に受かってめでたくこの娘と結婚。優秀な子供にも恵まれる、と

というのがありがちなパターンである。作者自身は科挙に受かることはなかったが、「聊齋志異」は多くの作家に影響を与えつつ、未だに傑作として読み継がれている。科挙に受からずに小説を書いて名を成した人もいれば、江湖残局を集めて「象棋譜大全」に収まるほどの名著「竹香齋」を編纂し、シャンチーの発展に貢献した、という人もいるのである。さて、「聊齋志異」に限らず、狐がかかわる話には約束事のようなものがあって、人間の姿をした狐は「胡」という姓を名乗るのである。（中国語でも「狐」と「胡」は同じ発音なので、「胡です」≡「狐です」という二重の意味になる。）そんなわけで、「胡」栄華の棋譜を並べるたび、常人離れした感覚と才能に「この人、本当は狐なんじゃないのか？」と思わされるのである。

No448 2022年3月号

「チャンピオンメーカー」(熊野和伸)

民間のゴルフ大会などで最下位の一つ上のことを「ブービー賞」、最下位を「ブービーメーカー」と言いますね。本来「ブービー賞」とは最下位のこと、冗談みたいな賞品を与える、まあ親睦のための遊びみたいなものだったそうですが、日本では、ブ

ービー賞の賞金・景品がだんだん豪華になってきて、わざと悪いスコアを出して初めから「ブービー」狙いの人が出てきたため、狙いにくい「最下位の一つ上」の順位をブービー賞と言うようになったそうです。

では、最下位の反対「チャンピオン」についてです。シャンチーのような二人対戦型の競技で10人参加の試合を勝ち上がり方式トーナメントで行えば、3回か4回勝つと優勝です。参加者の半数以上とは対戦しませんが、上に行くほど手ごわい相手（のはず）なので、優勝者が最強というわけです。ただ、一発勝負では、組み合わせ方で結果が変わることがあります。くじ引きなどで組み合わせを決めると、優勝候補同士が1回戦で当たることもあるからです。

「総当たりリーグ」方式なら、10人が全員と1回ずつ対戦して一番勝ち数の多い人が優勝ですから、組み合わせの偶然性による偏りは避けることができます。しかし、これが100人による試合となると、99回戦、4950試合にもなるうえ、10回戦くらいで、参加者の約7割は優勝の可能性がなくなり、以降ほとんどの試合が優勝と無関係の「消化試合」になってしまいます。そこで、参加者が多い場合、例えば100人を10くらいの予選リーグに分けて行い、上位2名ずつくらいで2次予選→本戦リーグ、または本戦トーナメントで優勝を決めるという方式や全員が同じ回戦数を闘い、勝ち星が同じ、または近い競技者同士を対戦させるスイス方式などが取られます。国際試合なら、各国で予選→世界大会ということもあります。

さて、何の競技であれ、ご近所10人の総当たりで決まった優勝と世界から100万人が参加して決まった優勝、どちらに価値があるでしょうか？もちろん、後者ですよ。でも100万人が参加する競技で、毎年のように1回戦で負ける人（つまり競技人口の半分の50万人）が「全然勝てないから競技やめた」、で次の年は参加者が50万人、次の次の年は25万人、次の次の次の年は12万5千人と、どんどん競技者が減っていったらどうでしょうか？

最後は「世界一」を争うくらいの強い数人しか競技者がいなくなってしまう。それでは町内会の大会と大して変わらないことになりませんか？そうなのです。100万人の競技者の頂点（つまりチャンピオン）を生む「チャンピオンメーカー」とは、毎回1回戦で負けるような人たちなのです。弱い人たちがたくさんいる（つまり競技人口が多く、強い人もそれに比例して大勢いる）中を勝ち抜いてこそチャンピオンの価値も高まるというものです。

してみると、私たちみたいなシャンチー万年B級競技者も世界チャンピオン誕生に貢献している、ということじゃないですか！よし、もういっちょ頑張るか！